

日本生命倫理学会「向精神薬の適正使用と生命倫理」部会(略称:向精神薬部会)

第5回:テーマ「デュアルオレキシン受容体拮抗薬(DORA)ってどうなの?:

最近の睡眠薬は夢の新薬か?」

日時:2026年3月27日(金)19時30分~21時(90分間) Zoom開催

第131回くすり勉強会との合同開催

話題提供 ①小田 陽彦(兵庫県立ひょうごこころの医療センター)

演題1: オレキシン受容体拮抗薬は出口戦略が肝要

②鈴木映二(東北医科薬科大学精神科)

演題2: オレキシン受容体拮抗薬の現在位置

以下より前日までに登録必須。★参加 URL は前日までに送信します。

<https://forms.gle/SnZKrL2n2ggdx5BX7>

主旨:この20数年間で、わが国ではベンゾジアゼピン受容体作動薬の依存性が徐々に臨床上の大きな課題として浮上し(古い臨床でのバルビタール系睡眠薬の激しい依存性を知る者たちの間で、ベンゾジアゼピン系睡眠薬の依存性に対する認識が遅れたきらいはあるのだが)、依存性のない睡眠薬が待望されていた。こうした状況の下、日本の製薬企業が世界に先駆けて新奇な作用機序を持つ画期的な睡眠薬として開発したのが、デュアルオレキシン受容体拮抗薬(DORA)であり、依存形成が極めて少ない睡眠薬であるとして大きな期待が寄せられていた。だが、DORAは新奇作用機序の医薬品であるため、さまざまな懸念もあった。たとえば、2014年11月、スボレキサントが、世界初のオレキシン受容体拮抗薬として、米国より早く、日本で販売開始されたが、上市に先立って、日本医師会疑義解釈委員会より本剤の二次性不眠に対する有効性・安全性につき問題が提起され、医師・薬剤師向けの適正使用推進資材が作成・配布されるに至った。この他、日米での承認用量の違い、高齢者への投与の際の副作用なども懸念された。その後、本邦ではDORAがレンボレキサント(販売開始2020年7月)、ダリドレキサント(同2024年12月)、ボルノレキサント(同2025年11月)と市場に投入され、現在4種類のオレキシン受容体拮抗薬が国内で販売されている。特にレンボレキサントは市販開始から短期間で売り上げを大きく伸長し、現在、我が国の睡眠薬市場で、年余にわたってトップの売り上げとなっている。だが、これは裏を返せば、ベンゾジアゼピン系睡眠薬が依存性への懸念から処方しにくいことの反動で、依存形成が極めて少ないとされるDORAを投与することへの処方医側の心理的抵抗が乏しくなっている可能性(換言すれば、安易な処方)があるのではないかという疑問が生じる。また、DORAが新奇作用機序であることから、ベンゾジアゼピン系睡眠薬とは異なるDORA独特の副作用プロファイルを熟知することの必要性も浮上する。そこで第5回向精神薬部会では、2人の演者を迎えて、DORAを中心にその功罪を縦横に論じていただく。まず、小田陽彦先生から、DORAの概要と使用に際しての留意点(あるいは加熱するマーケティングに対するエビデンスを踏まえた冷静な評価)をまとめていただく。次に鈴木映二先生より、DORA導入時の臨床的な教訓や安全性に関するエビデンス、ビッグデータからみた処方数の変化、フォーミュラリなどの実践をご紹介いただく。今回の部会が、向精神薬への「かのような了解」(als ob Verstehen)に対する戒めとなるかもしれない。

\*本部会で話題を提供したい人・部会で検討したいテーマを随時募集します。アイデアを歓迎します。

お問い合わせ:栗原千絵子: [chieko.kurihara@nifty.ne.jp](mailto:chieko.kurihara@nifty.ne.jp)